

第37回OYO展に参加して

黒岩 正信
KUROIWA Masanobu
本誌編集企画小委員長



平成22年10月13日～14日の両日、秋葉原UDXギャラリーにて「大地といきる」をテーマに第37回OYO展が開催されました。

10月13日の午後に「改正土壌汚染対策法は何を変えたか？」というセミナーが行われた直後に会場に着いたこともあって、多くの人で混雑していました。今年の4月1日に同法が改正施行されたこともあって、ゼネコン各社の参加が多かったようです。

私は、『ライフラインの維持管理とOYOの「見える化」技術』のセミナーに参加しました。(写真-1：セミナー状況) このセミナーではまず最新の国土交通白書でとりまとめられた各社会インフラの老朽化比率と予防保全的な対策計画策定の必要性が示されまし



写真-1 セミナー状況

た。道路橋や下水道などの社会ストック毎の長寿命化、老朽化対策の進捗率も現時点では低い状態ようですが、早期発見、早期改修の予防保全的取り組みを強化することで、更新できないストック量は従来の方法に比べて大幅に減少することも示されていました。東京都では、下水道の老朽化に伴い年間1,000件の道路陥没事故が発生しているため、これから3年間で約300kmの改修を計画しています。この中で予防保全的に対策を取ろうとすると、複雑で高度な工事が必要になる事例も示され、いかに経済的で合理的な計画が立てられるかが課題のようです。そこで、最新の技術を導入し、調査精度を上げ、調査結果を「見える化」するための事例として、表面波探査と重力探査を組み合わせた高深度の空洞探査や道路路面下の埋設物・空洞を「見える化」する「ロードビジュアライザー」等が

紹介されました。また、都市内では、いろんな構造物や埋設物が近接しているために残された課題もあるようで、これらの状況に対応するために、今年の4月に組織化された維持管理推進室の安藤氏が講演者でした。

展示会場でも「ライフサイクルコストを低減する技術」を中心に説明を受けました。地下の空洞や埋設物を効率よく調査するための「ロードビジュアライザー」は電磁波レーダーの車載システムでこの4月から商品化し実績を積み重ねているということで牽引されるレーダーの実物が展示されていました。(写真-2：会場風景) 河川構造物の維持管理の所では、表面波探査と電気探査を併用した堤防調査技術がパネル展示されていました。特に電気探査は送信器と受信器が接続



写真-2 会場風景

されたケーブルと地盤間のキャパシティブ・カップリングを利用して測定を行うシステムで、かなり迅速に調査できるシステムであると思われました。

通路の反対側には、「土壌汚染調査から修復までの“One-Stop-Service”」のコーナーがあって、多くの人が集まっているようでした。これまで対象にされていなかった自然に潜む重金属も「法の対象」となったとのことで、推進工事やシールド工事で排出される掘削土も対象になる可能性があるということのようです。

コンサルタントとして上流の企画提案から技術の提供までを展示した総合的な展示会であり、二日間で1,332人の参加者があり、その内訳は民間が1,200名と多く行政ならびに大学関係者・学生等がそれぞれ100名未満という状況も納得でした。